



特集

# のおもてなしの輪

東京オリンピック開催決定に沸いた今年、「おもてなし」という言葉が注目されています。大勢の観光客が訪れ、多くのイベントが開かれる本町には、おもてなしの心があちこちにあります。今月号では、そのおもてなしの数々を紹介するとともに、これからのおもてなしのあり方を考えます。



## Pick Up 今月のイベント

### 創立 50 周年を 盛大に祝う

猪苗代中学校の創立50周年記念式典は10月25日、同校で行われ、関係者が半世紀の歩みを振り返るとともに、さらなる飛躍を誓いました。

同校は昭和39年に当時の猪苗代中、千里中、翁島中の3校を統合して開校。昨年度までに8855人の生徒が卒業しています。

式典では校歌斉唱の後、生徒がスライドで学校の50年の歴史などを紹介。記念事業実行委員長の矢吹孝志同窓会長が「50年の節目を心一つに喜び合いたい。これから新しい歴史を刻んでほしい」とあいさつし、宇南山忠明校長が式辞を述べました。来賓を代表して前後公町長、土屋重憲教育長らが祝辞を述べました。

歴代校長やPTA会長に対する感謝状贈呈も行われ、実行委員会からは同校に50周年記念事業として新調した校旗が贈られました。

生徒会長の新田峻介さん(3年)が生徒を代表し「50年の歴史を誇りに、伝統をしっかりと受け継ぎ発展させ、後輩たちに伝えていきたい」と感謝の言葉を述べました。

式典終了後、みちのくボンガーズのメンバーによる記念講演も開かれました。

まちの応援マガジン いなわしろ  
**広報猪苗代**

Dec.2013  
**12**  
No.638

### 今月の表紙



長瀬小マーチングバンドの移杖式に臨む、ドラムメジャーの三瓶水葵さん。「自分たちは叶わなかったけど、後輩たちには頑張って全国大会に行ってほしい」という思いと共に、指揮杖を後輩に託しました。(関連16ページ)

【撮影日】 11月22日  
【撮影場所】 カメリーナ

## Contents — 【目次】

- 02 巻頭紹介 第25回ふくしま駅伝
- 04 PICK UP
- 05 特集 おもてなしの輪
- 14 自治功労者表彰式・合同表彰式感謝状伝達式
- 16 まちのわだい
- 20 笑顔でこんにちは／猪中野球部県大会出場／通学キャンプ
- 22 いなわしろタウンページ
- 26 暮らしの情報広場
- 28 みんなの美術館／食生活改善推進員コーナー

## ■キーマンに聞く 新そば祭りの「人気の秘訣」と「今後の課題」



年々減っている  
打ち手の養成が課題

猪苗代手打ちそばの会会長  
**佐藤善司さん**

古くから会津に伝わるそば打ちでは、麺棒を1本しか使いません。猪苗代では今でもそうですが、ほかではより効率的な3本の麺棒を使うやり方が主流になってきています。そば打ちでも、猪苗代と同じやり方で実演しているところはほとんどありません。

新そば祭りは、そういった伝統や技術を守り、伝えていくという点でも意義のあるものです。しかし、私たち手打ちそばの会では高齢化が進み、年々会員が減っているのが現状です。そば打ちには技術が必要です。お金を払う価値があるそばの打ち手を養成するには、時間もかかります。町がソバの振興を進めていくのなら、例えば役場職員の打ち手を増やすというのも一つの方法ではないでしょうか。

あとは、実演する時に隣で説明してくれる人がいたらいいですね。実演を見るのを楽しみに来るお客さんも多いので、喜ばれると思います。

大切なのはお客様の  
立場に立つこと

猪苗代町振興公社総務課長  
**小野秀男さん**



猪苗代新そば祭りの誇れるところは、4000食すべての完成度が高いということです。一人のお客様が口にするそばは、私たちにとっては4000食のうちの一食。でも、そのお客様にとってはその一杯がすべてです。ですから、少しも妥協できません。

そういった「お客様一人一人を大切にする」「お客様の立場になって考える」という意識は、そば打ちの人や厨房の中だけでなく、フロア係、案内係、駐車場係などすべてのスタッフに浸透していると思います。だからたった2日間でも、担当する人が替わっても、同じサービスが提供できるんです。

新そばまつりは、「町のイメージ」という大きなものを背負った、多くの人で支える一つの大きな店です。すべてのスタッフがそれを理解し、真摯に、そして誠実に取り組んでいることが、お客様の満足につながっているのだと思います。



2



1

1 「じいちゃんが作ったそばはおいしいよ」と笑顔でそばを食べるのは、そば打ち名人、佐藤善司さんの孫、はるかちゃん(左)とあかりちゃん 2 猪苗代そば口上を披露した吉崎ミナ子さん 3 今年も長い行列ができました



### 【厨房テント内の様子】 来てくれたお客さんのため、スタッフたちが休む間もなく働く



▶ 食器洗い



▶ そばゆで



▶ 天ぷら揚げ

2000人を超えるお客さんが訪れる、県内最大級のそば祭りとなりました。県外からも多くのリピーターが訪れるなど、県内外に「蕎麦の里・猪苗代」を発信しています。

町や町商工会、猪苗代観光協会、町振興公社などをつくる実行委員会の主催で、今年の新そば祭りには、それらの団体から延べ約400人もスタッフが動員されました。

そば打ちには、猪苗代手打ちそばの会と町振興公社が担当。4000食を超えるそばを、名人たちが一切妥協することなく、極上のそばに仕上げます。

厨房テントでは、そばゆでや天ぷら揚げ、盛り付け、食器洗いなどの係がそれぞれの持ち場で休む間もなく働いています。

会場内のスタッフは、お客さんに快適に過ごしてもらえようという心掛けて動いています。

設備の充実や運営方法の改善も毎年行ってきました。昨年からゆで釜とフライヤーを増設し、待ち時間の短縮を図りました。また、祝言そばは、スタッフ間の連携によって、よりあつあつで提供できるようになりました。

これらの努力はすべて、お客さんに喜んでほしいから。人気を支えているのは、関わる人すべての「おもてなしの心」です。

## 心一つに おもてなし

今年も大勢の人でにぎわった新そば祭り  
その人気を支えるのは「おもてなし」の心



### 第17回 猪苗代新そば祭り

今年も盛況だった新そば祭り

今年で17回目を迎えた「猪苗代新そば祭り」は11月9、10の両日、カメリーナで開かれました。県内外から2日間で4000人を超えるお客さんが訪れ、猪苗代の新そばを心ゆくまで味わいました。

振舞われたそばは「祝言そば」と「ざるそば」の2種類。「天ぷらの盛り合わせ」や「そばがゆ」も用意されました。

会場では、▽「猪苗代手打ちそばの会」の名人たちによるそば打ち実演▽物産市でのそば粉や野菜などの販売▽日本舞踊や「猪苗代そば口上」なども行われ、参加者は「蕎麦の里」の秋を五感で楽しみました。

家族で訪れた遠藤寛之さん(福島市)は「来たのは今年で3度目。会津で開かれるそばまつりの中で一番おいしい。日程が合えば毎年でも来たい」と話していました。

#### 新そば祭りの裏側

猪苗代新そば祭りは、町の特産物であるソバの振興を目的に始まったもので、東日本大震災以降は町の食の安全・安心のPRにも大きな役割を果たしています。今では多い時で一日に



## インタビュー

猪苗代湖ハーフマラソンのボランティアとして参加

### 猪苗代高JRC委員会の皆さん



左から渡部舞香さん、桑原杏依さん、佐々木裕香さん、佐野衣緒捺さん(いずれも3年)

学校にボランティアの募集はこなかったのですが、町を盛り上げるお手伝いがしたいと思い、事務局にお願いしました。

当日は主に手荷物の受け渡しの仕事をしました。朝の5時半集合で、暗いし、眠いし、寒いし、仕事はとても忙しかったです。

大変だったけど、県外から来た人も多かったの、いろいろな人と話をすることができて楽しかったです。どのイベントに行ってもそうですが、一番うれしいのは、参加者から感謝されること。「ありがとう」と言われると、自分たちもうれしくなるし、やってよかったとしみじみ思います。



力強い太鼓の音が、ランナーたちを元気づけたよ。ファンファーレもかっこよかったね



猪苗代吹奏楽団が開会式で演奏を披露。ハーフマラソンスタートのファンファーレも演奏した。いなわしろ天鏡太鼓と川桁謡真鼓楽会、猪苗代芸能保存会はスタート・ゴール地点やコースの途中で勇壮な太鼓の演奏を披露し、ランナーたちを鼓舞した



冷たい雨に打たれながらも頑張る姿に、じんときたよ



体育協会加盟団体の皆さんはゴールしたランナーたちに「お疲れさまでした」と笑顔でタオルを配った



この日は寒かったから、温かい豚汁はうれしいね。心も体も温まるよ



町食生活改善推進員会と町商工会女性部が約4000食分の豚汁を振る舞った。地元産の食材も使い、町の食の安全・安心もPRした



そばも大人気だったね。地元の農産物や特産品などを売っているブースもあったよ



「祝言そば」を提供したいわし館のブースには長い行列ができた。猪苗代の名物に大勢の人が舌鼓を打った

ご当地キャラ  
ヒデヨくんが  
イベントでの  
おもてなしを  
レポート



## 猪苗代湖 ハーフマラソン

スタートの様子。スタート・ゴール地点以外の場所でも多くの町民が選手らに温かい声援を送った

### 猪苗代タクシー

乗務員 高橋正一さん(左)、浅川勇一さん



私たち運転手は、何と言っても、お客様を安全に目的地までお送りするのが第一です。それから、快適に過ごしてもらえ

ように心掛けて運転しています。町外からイベントや観光に来るお客さんは、みんなとても楽しみに猪苗代にいらしゃいます。ですから、「来てよかった」と思って帰ってもらいたい。目的地に着くまでの短い時間でも、気分良く過ごせたらうれしいですね。重い荷物は持ってあげる、足が不自由な人は歩くのを支えてあげるなど、一つ一つは小さくても、そういったことが積み重なれば、磐梯山や猪苗代湖などの景色もよりきれいに見えるのではないのでしょうか。いい思い出づくりのお手伝いできたらうれしいですね。

### 民宿松屋

宇南山隆さん(左)、信子さん



うちに来るお客さんは、常連さんや学生の宿泊客がほとんど。1回くれば、次からはもう家族のようなものです。年末年始に

来た常連さん同士で「今年も会ったね」などと話していることもあります。うちは何でもあけっぴろげ。お客さんとも何でも話します。そんな感じなので、お客さんたちはまるで家族のように振る舞っていて、「この人は本当にお客さんなのか」と思うこともあるし、逆に私たちが気を使わずに「俺たちは客だぞ」と言われることもあります。特別なおもてなしということは意識していないし、なんで来てくれるのか私たちにわかりませんが、常連さんたちは毎年、「ただいまー」と言って帰ってくるんです。

イベント以外にもある  
観光地ならではの  
おもてなし

イベントに来た人たちも、こんなおもてなしに出会えるかもね



## いろいろなおもてなし

四季を通じてさまざまなイベントが開かれる本町  
イベントはもはや猪苗代のお家芸。おもてなしもハイレベル

週末ともなると、イベントのない日が珍しいほどその数が多い本町。磐梯山や猪苗代湖などの恵まれた自然に加え、野口英世博士の生誕の地であることや土津神社、亀ヶ城公園などの名所・旧跡も多く、豊富で多様な観光資源を持っていることがその理由です。  
登山にウォーキング、マラソン、トライアスロン、スキー大会など、自然環境を生かしたスポーツイベントから、野口英世博士や保科正之公を顕彰する文化系のもので、さまざまなイベントが開催されます。  
先ほど紹介した猪苗代新そば祭りのほかに、フリースタイルスキーワールドカップや猪苗代湖ハーフマラソン、風とロック芋煮会など、数千人を集めるイベントも年に数回開かれ、本町はまさにイベント王国といっても過言ではありません。そういった地域の特性から、町民がスタッフやボランティアとしてイベントに参加する機会が多く、そこでのおもてなしは参加者から高い評価を受けています。  
10、11ページでは、参加者の満足度がとても高い2つのイベントを紹介。その魅力はどういうところにあるのでしょうか。



1 花の脇芽取りの作業を丁寧に教える、メンバーの渡部雅幸さん(左)。参加者たちは、きれいな花が店頭並ぶまでに多くの手間が掛かっていることを学んだ 2 J A トマト共選場の見学では、作業の内容や出荷の流れだけでなく、渡部さんらがおいしいトマトの見分け方など、消費者にうれしい情報も伝授 3 ツアー終了時、みんなで記念撮影。参加者たちの表情からも満足度がうかがえる

参加者の声

- ・会津の農業人と触れあえたことが何よりよかったです。農家の方の熱い意欲と思いが伝わり、自分までウキウキしました。
- ・いろいろな話ができ、たくさんを知ることができました。農青連の皆さんの明るさを見て、日本の農業の未来は明るいと思いました。
- ・期待以上にいろいろな体験ができた。
- ・農産物が本当に安全だということがわかった。逆に検査をしていない他県が心配になった。今後は自分なりに情報収集をして、正しい情報を知りたい。
- ・親切で温かい対応で、リラックスしながら農業体験できました。

(参加者アンケートから抜粋)



# 伝わるおもてなし

気持ちのこもったイベントは 思いが伝わる 楽しさが伝わる

10月12、13の両日、本町で農業体験ツアーが行われ、首都圏から5人が訪れました。

このツアーは、原発事故による風評被害の払しょくを図ろうと、J A あいづ青年連盟猪苗代地区(以下農青連)と農青連キャベツ研究会が実施したものです。

参加者たちは2日間で花やトマトの収穫、稲刈りなどさまざまな農作業を体験したほか、農作物の放射能検査などを見学しました。

初日の案内役を務めた農青連の渡部雅幸さんは、行く先々で参加者たちに丁寧に説明。体験受け入れ先のメンバーも熱心に作業の手ほどきをしました。12日夜に開かれた懇親会では、メンバーらが参加者と意見交換をするなど、親睦を深めました。

参加者アンケートでは、全員が「福島の農産物は安全だと感じた」と回答。さらに体験内容も「満足」「期待以上」という結果に。メンバーたちの苦労や熱意も伝わり、大成功に終わりました。

J A あいづ青年連盟猪苗代地区

渡部雅幸さん(幸野)



「自分だったらこうしてほしい」と思うことをする

福島の農産物が安全・安心だということをきちんと理解してもらうには、実際に来てもらうのが一番。参加者に自分の目で確かめてもらい、それを周りの人たちに伝えてほしい。そう思って私たちはこのツアーを企画しました。

ツアーでは、作物を作るのにどれだけの手間が掛かるのかを理解してもらうため、丁寧に説明し、作業の手ほどきをしようと心掛けました。それが参加者の満足につながったのかもしれない。あとは、「自分ならこうしてもらえると嬉しい」という

ことをしてあげる。せっかく来てくれたのだから、「よかった」と言ってほしいですね。花や野菜を作るときの「消費者に喜んでほしい」という気持ちと同じです。

懇親会で参加者という話せたこともよかったです。メンバーたちの苦労や思いも伝わり、「これからは積極的に福島のものを買いたい」と言ってくれた人もいて、やってよかったと思いました。

来年も実施したいと思っていますが、難しいのは資金面。県や町など、行政がバックアップしてくれるとありがたいですね。

初 秋の磐梯高原の自然の中を、マウンテンバイク(以下MTB)にまたがり、風を切って駆け抜ける。第7回ジンギスカップIN磐梯高原は10月5、6の両日、磐梯南ヶ丘牧場内の特設コースで開かれました。

レースは、補助輪付きの自転車に乗る幼児のスーパーキッズクラスから、競技者向けのエリートクラスまでの男女別全16クラス。約300人の参加者は、磐梯山を望む絶好のロケーションの下、全力でレースに挑みました。

ジンギスカップの名のとおり、ジンギスカンが食べられるのもこの大会の魅力の一つ。ほかにも町の名所、旧跡などを巡る磐梯高原の魅力発信ツーリングや青空ヨガ教室、自転車キッズ検定など、参加者を楽しませる工夫が満載です。

そして、何よりも魅力なのがその一体感。会場にいる人みんなが楽しそうに盛り上がっていて、その雰囲気はまるで一つの家族のようです。

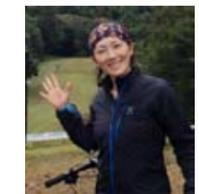


1 スーパーキッズのレースは、まるで幼稚園の運動会のようなごやかな雰囲気。自分のレースでは真剣な表情を見せるお父さんも、すっかりやさしい顔に 2 コースのあちこちで家族やチームメイトが声援を送る 3 魅力発信ツーリングで十六橋を案内する、いなわしろ伝保人会の田島一博さん(中央)。NHK大河ドラマ「八重の桜」やジオパークに関連付けて、ユーモアを交えながらわかりやすく解説した



参加者の声

佐藤京美さん(栃木県)



ツーリングはガイドさんがジョークを交えながら猪苗代の名所を説明してくれて、とても面白かったです。レースは初参戦ということもあり、期待と緊張でいっぱいでしたが、磐梯山を望む絶好のロケーションの中で、気分も爽快に楽しく走れました。応援の声も温かく、見る側としてもドキドキ楽しめます。手作り感満載で、みんなが一体となりレースを盛り上げる感じがとても好きです。また来年も参加します!

スタッフが楽しまないと、参加者だって楽しくない

ジンギスカップのいいところは、みんなが楽しめることです。レースを楽しむ、応援して楽しむ、ジンギスカンを食べる、牧場で動物とふれあうなど、楽しみ方はさまざま。参加者はもちろん一緒に来た家族みんなが楽しめるんです。

多くの人が閉会式まで残っているのも、この大会の特徴です。特産品が当たる抽選会があることも一因ですが、「もう少しここにいたい」と思わせる楽しい雰囲気もあるのだと思います。

人の気持ちは伝わるものです。例えば、

スタッフがつまらなそうにやっていたら、参加者だってつまらない気分になる。楽しそうにやっていたら、参加者ももっと楽しい気持ちになるのだと思います。

町内企業の協賛などのおかげで、資金面ではだいぶ助かっていますが、実行委員である友の会会員のほとんどが町外者なので、コースの草刈りや大会の準備などは、人数がそろわず大変です。

でも、自分たちの楽しさや参加者の笑顔があるから「次も頑張ろう」という気持ちになれるんです。

ジンギスカン友の会代表

森山栄幸さん(祐次)





佐藤智昭さん(曲淵)

曲淵大根クラブ会長。同地区の遊休農地の解消と農業の伝承を目的に活動する同会では、数年前から小・中学生などの農業体験を受け入れ、子どもたちに田舎の楽しさや農業の大切さを伝えている

## この土地ならではのおもてなし それが最高のおもてなし

おもてなしとは、なかなか難しいものです。過ぎてみればいいし、足りなくてもいけない。一生懸命もてなしたつもりでも、相手にとっては迷惑かもしれない。まずは相手の気持ちを考えてることが大切です。

おもてなしの仕方もさまざまですが、一番のおもてなしは、猪苗代ならではの「おもてなし」です。

この土地のものを食べて、この土地の人間と話す。飾る必要はありません。私たちが普段していることを、ごく自然にすることです。ここでしか味わえないことをすることが、何よりのおもてなしです。

豪華な食事はどこへ行っても食べられますが、ここで採れた野菜で、このお母さんたちが作った料理は、この土地でしか食べられません。その料理を囲んで、お客さんと会話を弾ませ

る。それは相手にとつてはもちろん、自分たちにとつても貴重なものです。

損得は関係ありません。おもてなしは相手を喜ばせたくてするものです。喜んでもらえれば、自分も満足できます。

おもてなしは、祭りに似ています。地域を活気づけるのも、町全体で取り組んだほうが良いという点でも一緒です。祭りは一つの地区だけでやるより、みんなが集まってやったほうが盛り上がりがあります。

楽しいところには、人がどんどん集まってきます。町全体がおもてなしであふれば、この町ももっと活気づくのではないのでしょうか。

人との出会いは人生を豊かにしてくれれます。人と人とを結びつける、「絆」が深まるようなおもてなしをこれからも続けていきたいです。



江花俊和さん(葉山)

猪苗代山岳会会長と猪苗代の偉人を考える会会長を務める。歴史にも自然にも詳しい猪苗代の達人。いなわしろ伝保人会にも所属し、観光客に猪苗代の素晴らしさを伝えている

## おもてなしに欠かせないもの それは「笑顔」と「あいさつ」

おもてなしになくてはならないもの、それは「笑顔」と「あいさつ」です。

「おはようございます」「こんにちは」と元気なあいさつをされると、自分も元気が出ます。笑顔で接してもらおうと、誰でもうれしいものです。

人の印象というものは、最初でそのほとんどが決まります。例えば私がお客さんに「ガイドの江花です。よろしくお願います」と笑顔で元気にあいさつをしたとします。すると相手は「感じのいい人だ。楽しい旅行になりそうだな」と思うでしょう。その瞬間、相手の心が開き、会話も弾むようになります。旅はとても楽しいものになります。「猪苗代に来て本当によかった」と思ってくれます。

猪苗代は観光と農業の町です。「観光」を大々的に掲げているのですから、町全体におもてなし

しが広がればいいと思います。例えば、 HALFマラソンやトライアスロンでは、今まで以上に大勢の町民が選手に声援を送る。観光客とすれ違ったときには、「こんにちは」と声を掛ける。それが町を挙げてのおもてなしだと思います。

訪れた人の印象に強く残るのは、その土地の「人」とのやりとりです。

走る時に大勢の町民が旗を振って応援してくれたら、「声援が温かくてとてもいい大会だった」と思うでしょう。行く先々で元気なあいさつをされれば、「猪苗代は本当にいい所だった」という印象を持つことができます。そういつたことがリピーターの獲得にもつながります。

来てくれた人みんなに「笑顔」と「あいさつ」、そして「気遣い」。私はこれからもそうしていきたい。そう思っています。

# これからのおもてなし

おもてなしの達人に聞く 町のこれからのおもてなし

ここまで紹介してきたのは、町にあるおもてなしのほんの一部です。おもてなしは、イベントだけでなく、町のいろいろな場所で見つけることができます。また、ここに登場した人たち以外にも、多くの皆さんがおもてなしの心を持っています。

おもてなしは、いろいろなものをつないでくれます。おもてなしを受けた人の喜びが、もてなした人の喜びにつながり、それが人と人とのつながりになります。おもてなしをする人同士の心も一つにしてくれます。それは、人の心と心をつなぐ輪のようなものです。その輪はきつと、周りを巻き込んで大きくなっていきます。

心のこもったおもてなしがあるイベントは、とても楽しく、居心地がいいものです。おもてなしの心を持つ人やおもてなしにあふれる地域は、みんないきいきとしています。魅力的な人や場所には、自然と人が集まってきます。おもてなしの輪は、そうやってどんどん大きくなっていくのだと思います。

おもてなしは、うれしいもの。ほっとするもの。わくわくするもの。

こういった気持ちは、おもてなしを受けるほうだけでなく、おもてなしをするほうも抱くも

のです。

おもてなしの輪が広がって、町中におもてなしの心があふれたら…。

想像しただけでわくわくしてきます。

おもてなしの心、持つてみませんか。おもてなしの輪に入ってみませんか。素敵な未来と仲間たちが、あなたを待っていますよ。

特集 おもてなしの輪 終わり

### 「攻め」の観光振興に向け、ご支援、ご協力をお願いいたします



前後 公 町長

町民の皆さんには、各種イベントに多くのご支援、ご協力をいただき、深く感謝申し上げます。

お陰様をもちまして、東京電力福島第一原発事故による風評被害で激減した観光客も震災前の水準まで戻りつつあります。現在は、「風評被害」というマイナスのイメージから脱却して、攻めの観光振興を行うべく、さまざまな事業を展開しているところです。

本町ではこれから本格化するスキーシーズンを迎え、来年2月には全国高等学校総合体育大会ス

スキー競技会、3月には FIS フリースタイルスキーワールドカップ福島猪苗代大会が開催されます。全国、世界各国から訪れる多くの選手、役員や報道関係者をはじめ、大勢の観客の皆さんを、町を挙げて、おもてなしの心でお迎えしたいと考えておりますので、あらためてご支援、ご協力のほどお願いいたします。

また、平成27年に開催する国内最大級の観光キャンペーン「ふくしまデスティネーションキャンペーン(DC)」に先駆け、4～6月にプレDCの開催が予定されており、本町においても積極的に取り組んでまいります。たいと考えておりますので、重ねてご協力をお願い申し上げます。